



# 「Boys in Love」

---

---

井沢さと

---

## Boys in Love

---

それは信じられない光景を目撃したことから始まった。

先輩から、今日入学してくるはずの一中――西讃第一中学の日栄一賀(ひさかえいちが)の様子を見てくるように言われて、休みにも関わらず登校していた俺、成瀬薫(なるせかおる)は、そこで我が目を疑うような光景に出くわした。

日栄一賀という新生は、中学に入った頃からすでに高校生を相手にもめ事を起こしていたが、争った相手を――たとえそれが女でも――必ず病院送りにするというので中三になる頃には「最強最悪」と呼ばれて、奴を取り込むつもりで手を出さなかった龍騎兵(うち)以外のチームからは目の敵(かたき)にされていたものだった。それが去年の夏頃、一度死にかけて、「身体が悪くて打たれ弱い」という噂が広まると、後輩の銀狐とかいう双子に代わりをさせて、すっかり大人しくなってしまったということになっていた。

だが、俺が見た限りじゃあ、奴は別に大人しくなったわけでも何でもなくて、ただ、お節介な後輩が奴に売られた喧嘩を片っ端から横取りして片付けるので、自分の手を汚す必要がなくなったというだけのことだった。

双子のいないところでは相変わらずで、噂を本気にして奴に喧嘩を売る頭の悪い連中は、触れるかどうかで即病院送りにされていた。

俺も何度か奴の喧嘩を見てきたが、相手を一発で戦意喪失に陥れる手際は、それはそれは鮮やかなものだった。奴としては、僅かな時間と手間ですべての効果が得られる最良のやり方なのだろう。

やりすぎじゃないか、っていう俺(ひと)の忠告も聞きやしなかった。

そんな奴がだ。いつも冷めた目をして枯れ枝でも折るように人間(ひと)の腕を折るようなそんな奴が、熱に浮かされたみたいにして女の後をふらふらとついていったのだ。

「ありゃ何の冗談だ」

俺は彩子(さいこ)を振り返った。

俺に付き合って登校していた幼なじみの内藤彩子は腕組みをして口元を緩めていた。

「おい、あれは日栄一賀に間違いないよな。女の方(ほう)は誰だ？」

彩子はくすりと笑った。

何だよ。

「薫ちゃんも知ってるはずよ」

俺の知ってる――子？

「誰...だ？」

「ケーコちゃんのお姉さんよ」

ケーコ、神田恵子(かんだけいこ)か？じゃあ、あれは――。

「環(たまき).....女史か」

神田環。二中――俺たちの出身校、西讃第二中きっての秀才――いや、天才と言ってもいい――で、誰しものが尊敬と畏怖を込めて彼女のことを「女史」と呼んでいる。そうか、彼女も今年入

学だっけ。

妹の神田恵子ともども、家が近いこともあって、俺たちの幼なじみには違いないんだが、環女史は妹のケーコと違って全然人付き合いしないし、ケーコ曰く放浪癖があるらしくて、滅多にお目にかかれることはないのだ。中学だって、学年首席の座こそ三年間守り通したが、出席日数は卒業できるギリギリだったらしい。

「何で一賀が環女史を」

そう口には出したが、その答えは俺にも分かっていた。ただ、どーしても信じられないだけだ。

あの「最強最悪」の日栄一賀が。

相手が美人で天才と誉れの高い環女史とはいえ。

「恋」をするなんて。

「あいつ、男と女の区別、できたのかよ」

俺はぼやいた。

「環女史を選ぶなんてかなり目が高いわね」

「冗談じゃないぞ。あんな腑抜けた顔して後つけて、どうするつもりだよ」

「どうもしないわよ。あの子じゃ、あれ以上環女史に近づけやしないわ」

彩子は面白そうに笑った。

たく。女って奴は。あの一賀でさえ「あの子」扱いかよ。

「何でそう思う」

「だって――。あの子のあんな顔見たことある？」

「あるわけないだろ」

「可愛いわよねえ。間違いなく『初恋』よ。自分でも何やってるか分かってないんだわ」

可愛いって――笑い事じゃないぞ。あいつ、「最強」じゃなくなったら龍騎兵(ドラグーン)からだって狙われかねないんだぞ。

一賀と環女史を目で追っていた俺は、二人が入学式のあった体育館からそのまま校門の方へ歩いていくのを見て、慌ててベンチから立ち上がった。

「あいつら、入学早々エスケープかよ」

二人の後を追って校門へ向かう。

ケーコに言わせると、ぼーっとしているようで環女史の行動を追うことはかなり難しい。緩慢な動作で動いているように見えるのに、ちょっとでも視線を逸(そ)らすともういなくなっているという。一度見失ったら見つけるのは至難の業だ。そのままふらりと旅に出てしまうこともあるらしい。

二人が視界から消える前に追いついとかないと。

「薫ちゃん、どうするの？あの子、今日、集会に連れていくの？」

早足に歩きながら彩子。

「先輩が挨拶させろって言ってたからなあ」

俺は空を仰いだ。

挨拶しろとは言っても、龍騎兵だって一賀にゃあ手を出しかねて、奴がうちの校区なのをいい

ことに勝手にメンバーだってことにして二高や三高の連中とやり合うのをただ見ていただけなのだ。あいつにしてみりゃ挨拶しなきゃならない理由などない。

しかし、龍騎兵としては面子上、呼び出して顔くらい拝んでおかなければならなかった。

「あの子に挨拶させられる？」

「させるさ。あいつだってバカじゃない。挨拶一つで三年間平穩無事に暮らせるんだ、俺なら喜んで挨拶してるぜ」

「あなたは平穩無事じゃなかったものね」

彩子は笑った。

笑い事じゃないぜ。俺がどれだけ苦労してるか。

「あいつのためにも俺たちのためにも穩便に済ませたいもんだな」

龍騎兵にはあいつをどうこうしようなどという考えはない。一一二高の踊る人形(ダンシングドール)を潰してくれただけでも、うちにとっちゃあ大きな貢献だったのだ。あいつの腕に頼らなくてもあいつの名前だけで対立チームの抑えにはなる。

あいつにももうバカな無理はさせたくなかった。

「骨が折れるわね」

まったく。

「お前も俺なんかと付き合ってなけりゃあ、もっと平穩に暮らせたのになあ」

俺は彩子ののにこにこ顔を見ながらしみじみと言った。

「幼なじみ」ってだけで、苦労させたよ、ホント。

俺たちは校門脇の駐輪場のところで二人に追いついた。

何がどうなったのか、ぼんやり佇(たたず)む環女史の前で、一賀が真っ赤になって俯いていた。

「ああ、薫ちゃん」

環女史は俺たちに気付いてこちらを振り返った。

家の近所の奴らは年下でも俺のことをちゃん付(づけ)で呼びやがる。彩子が率先してそうだから、誰も改めようとはしない。環女史も例外ではなく、滅多に会うことがなくても俺を気安く「薫ちゃん」と呼んだ。

「環女史、もう帰るのか？」

俺の方は、彼女には一目も二目も置いているので、皆と同じように「女史」と呼んでいた。

「ええ」

俺は次の言葉を待ったが、彼女は早退の言い訳もこれからどこへ行くつもりなのかも言いはしなかった。

「一賀、お前もか」

俺は一賀にも声を掛けた。

そのときになってようやく一賀は我に返ったようだった。

「俺...どうして」

自分がどうしてここにいるのかも解らない様子で、きょとんと俺たちの顔を見ている。こりゃ、重症だな。

「式後はホームルームだろ」

俺は新入生の予定を教えてやった。

「あんた、成瀬薫」

一賀はまだはっきりしない顔つきだった。大丈夫かよ。

「お前、こんなところで何やってんだ」

奴は俺と彩子の顔を代わる代わる見てから空を見上げた。環女史の方へは意識的にか無意識なのか、顔さえ向けようとしなない。

「あんた、ここの学校だったっけ」

こいつ——惚(とぼ)けてんのか。——それとも、一高龍騎兵をほかの連中と区別してなかったのか。

「お前ねえもう少し上手く世渡りしないと身体が保(も)たねえぞ」

俺は聞きはしないだろうと思いながらも忠告した。身体が弱いくせに、誰かに守ってもらうことも、引くことも知らない。お節介な後輩だって学校にまではついて来られないんだからな。

一賀はふうっと息を吐(つ)いて俺に視線を戻した。

——戻った...のか？

一賀の目はさっきまでと違って冷めた——いつもの目に戻っていた。

「あんたは、世渡り上手だって言うのか？成瀬薫」

くすっと俺の横で彩子が笑う。

いつもの奴だ。俺を年上とも思っていない。

「お前みたいに無駄な喧嘩を売ったり買ったりはしないさ」

俺は無駄な問答を始めた。

「バカと連(つる)むよりはいい」

この一年、こいつとこういうやりとりを何回繰り返しただろう。

「連む必要はないさ。挑発さえしなけりゃな」

俺は気長に一賀に付き合ってきた。

確かにバカな奴は多い。しかし、無駄な怪我人は減らしたかった。特に一賀の弱点が知れた以上、無傷の龍騎兵との衝突だけは避けたかった。

「じゃあ、俺の半径二百メートル以内には近付くなと言っとけよ」

一賀は俺の言葉を撥ね返し続けてきた。

——やっぱり無駄か。

俺はゆっくりと息を吸い込んでそれを溜息にして吐き出そうとした。そのとき————。

「中途半端ねえ。薫ちゃん」

環女史が口を開いた。

その声に一賀がぴくんと反応した。

「その殻を砕くのにその程度の圧じゃだめだわ」

環女史の言葉はいつも難しい。殻を砕く——圧？俺が中途半端だって？

声に操られ、一賀が見てはいけないものを見ようとするように恐る恐る首を回した。筋肉の軋

む音が聞こえそうだった。

「壊してしまうのが怖い？」

環女史は続けた。

怖い——俺が？何を？

「ああ、そうなのね」と彩子が環女史の言葉に頷く。

何、だよ。

「微温(ぬる)いわね」

環女史は意味ありげに笑って一賀の方へ手を伸ばした。

奴はもうだめだった。催眠術でも掛けられたようにふらふらとその手に吸い寄せられていく。

微温(ぬる)ってどういうことだよ。俺のやり方が手緩かったって言うのかよ。そいつが俺たちを拒絶し続けてきたんだぞ。

一賀のくそつたれ。棘だらけで、人なんか寄せ付けもしなかったくせに。

「目的があるなら手段は選んでいられないのよ」

環女史は俺たちが見ている目の前で、一賀の奴に口付けた。

あ—————。

——たっぷり二十秒以上俺たちは待たされた。

ゆっくりと二人が離れる。

一賀は崩れるように膝をつき、ぺたんと地面に座り込んだ。

「魂まで抜かれたみたいね」

彩子の耳元で囁く声が首筋を撫でる。

一賀はふらあっと後ろへ倒れた。

環女史はぶっ倒れた一賀を見下ろして、

「神田環よ、宜しく」

と言った。踵(きびす)を返してふらりと校門へ向かう。このままにする気かよ。

「環っ、こいつ、どうするんだよ」

俺は一賀の襟元を掴んで引き起こした。

中身のない人形のように軽い。惚(ほう)けた、幸せそうな顔しやがって。

「一度くらい殴ってあげれば」

環——環女史はそれきり振り返りもしなかった。

「相変わらず、彼女、痛いところを突くわね」

「どういう意味だよ、あれは」

俺は彩子を振り仰いだ。——解ったような口ききやがって。

「その子どうするつもり？」

「どうするって、連れてくさ、正気に戻してな」

「微温(ぬる)い、ね」

「だから、どういう意味だよ」

彩子は俺の肩に手を置いて、俺の顔を覗き込んだ。

「熱くもない、冷たくもない。微温いのよ、あなたは。——そう、誰に対しても、ね」  
彩子の顔が近付いてくる。お、おい、待てよ。さ、彩子。お前まで、何—————。  
彩子は俺の唇に軽く触れるだけのキスを落とした。初めての、キス。

「あたし、『幼なじみ』っていう立場に満足して、あなたを庇いすぎてたのかもしれないわ。  
あたしが言うべきだったのね——。人を寄せ付けていないのは、あなたの方なのよ。あなたは何事にも本気になることを怖がっている。壊れてしまうことを怖れているんだわ。あなたが本気にならないって解っていたから、あの子もあなたを撥ね付けてきたのよ。あたしも——本気にならないといけなかったかしら」

何で—————心臓が痛む。

彩子はもう一度ゆっくり俺に口付けた。痛...あ...、何で.....。俺は、痛みに耐えかねて、意識を手放した—————。

【お茶会同好会シリーズ】中、最も堅い二大カップルの初期のお話。いやいや、まさか薫ちゃんの一人称で書くことになるとは、思いもしませんでした。

ほんとは一賀ちゃんの初恋の話を書くつもりだったのに――。一賀ちゃんが何故「最悪」じゃなくなったのかっていう――。でも、一賀ちゃんに関してはもう環女史に魂抜かれたとしか言いようがない。環女史のオーラに捕まっちゃったのね。虜ってやつよ。環女史に関してはシリーズ中最も得体の知れない人物なので詳しく語られることはありません。というわけで一賀ちゃん環女史組の恋愛話はこれっきり、かな。

薫ちゃん彩子さん組については、あまりにも王道カップルなので、本人たちも全くその気がなかったって言うところがこの話の筋って言うか何というか。二人ともお互いがいるのが当たり前で、「幼なじみ」っていう関係以上のことを考えてもいなかったのね。特に薫ちゃんをああい性格だから放っておくといつまでもこのままだったでしょうし。いや、でも、この後も薫ちゃんはこのままか。彩子さんにちゅうされてぶっ倒れたことは覚えてるんだけど、知らない振りして今まで通りの付き合いをしていくわけです。ううう、微温い男。

薫ちゃんがどうしてこういう性格になっちゃったかっていうのは、本人でさえも記憶の彼方で、彩子さんと羅牙さんのお母さんと環女史くらいしか知らない話。結局、高校三年間を通して薫ちゃんが本気になったのはたったの一回です。誰が本気にさせたかっていうのはネタバレになるからまた別の機会に。

じゃ、みなさんまた会いましょう。

## 「Boys in Love」

<http://p.booklog.jp/book/40234>

著者：井沢さと

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/teatimemate/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40234>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40234>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.